

# 日本人英語学習者の「誤」法から見えてくるもの： 学習者コーパスと教育経験から生じた局所的文法指導の重要性

仁科 恭徳 (立命館大学) 吉村 征洋 (梅光学院大学)

This article attempts to present the usefulness and pedagogical value of using learner corpora. Using a very rich source of the data provided from learner corpora, this article prioritizes the specific reference to particular grammatical errors made by Japanese learners of English, presenting how learner corpora can be utilized to reveal such mistakes. In order to understand Second Language Acquisition (SLA), this paper suggests that data from learner corpora also need to be carefully compared with a wider range of references (e.g., teachers' experiences, data from general reference corpus, and normative grammar presented in, for example, dictionaries) to improve EFL pedagogic grammar teaching for Japanese learners of English.

キーワード：局所的英文法指導、学習者コーパス、語法

## 1. はじめに

本稿では、日本人英語学習者に典型的に見られる英文法の誤用例を学習者コーパスから抽出し、質的にその実態を探る。同時に、論者自らの英語教育経験から獲得した指導が複雑な例も紹介し、どのように解説すれば学習者の理解に貢献できるかを提示する。

まず、前半では「前置詞と不定詞の to の混同」や「カタカナ語（外来語）の知識の介入」など初級レベルの日本人英語学習者に典型的に見られる英語の「誤」法を紹介し、授業内で局所的に指導する必要性があることを主張する。特に、具体的にどのような英文法指導を進めるべきかを示すべく、学習者コーパスから抽出したデータを基に改善案を示したい。

また、後半では、論者の英語教育経験時に出くわした中・上級レベルの英語学習者

においても理解が複雑な文法事項に関して論を進める。特に、「動詞シノニムのアスペクト問題」や「副詞の意味的パターン」など、近年の英語学習参考書などにおいてもあまり触れられていない文法事項に焦点をあてる。

## 2. 学習者コーパス概観

学習者コーパスの歴史はまだ浅く、その出発は EF[S]L 専門家や英語教材関連の出版社が学習者コーパスの理論的・実践的有用性を認識し始めた 1990 年代初頭辺りである。学習者コーパスの中でも International Corpus of Learner English (以下、ICLE) は有名で、母語別の英語学習者コーパスで国際的な大学間の協力の基に編纂された。ICLE には、大学生の小論文 (argumentative essay) が約 200 万語収録されている。また、母語話者との比較用統制コーパス (LOCNESS) も構築されており、学習者と母語話者の表現の計量的な比較が可能である。現在では、ICLE 以外にも母語別英語学習者コーパスの Longman Learners' Corpus (LLC) や、中国人英語学習者コーパスの Hong Kong University of Science and Technology Learner Corpus (HKUST) なども構築されており、これらのコーパスに基づいた研究結果も発表されている。例えば、Milton (1998) では、HKUST を用いることで広東語を母語とする英語学習者特有のエラーを指摘し、典型的な過剰・過少使用に対応した教育用ツールに関する提言を行った。このような学習者コーパスの出現は研究のみならず学習教材の編纂過程においても使用されつつあり、Longman Essential Activator (ロングマン新英語表現辞典) もその一つである。

このような潮流に倣い、日本の英語教育界においても日本人英語学習者コーパスが近年構築されつつある。例えば、Nagoya Interlanguage Corpus of English (NICE) は、日本人大学生の英作文と英語母語話者の添削文をコーパス化し、添削前後の英文の比較を可能にした。また、NICT JLE コーパスは日本人 1281 人 (タグ付き 167 人) の英語スピーキングデータを集めた約 100 万語の学習者コーパスで、20 人分の英語母語話者による統制コーパスも添付されている。さらに、Corpus of English Essays Written by Japanese University Students (CEEJUS) は、中上級の英語力を持つ日本人大学生のエッセイを基に構築した 190,488 語からなる学習者コーパスで、学習者のレベルが観察できるように TOEIC のスコアがタグ付けされている。このような学習者コーパスを活用することで、日本人英語学習者の誤用 (エラー) が可視化され、具体的な対策案を講じるための基礎データの獲得が以前より容易になったと言えよう。

本稿は、学習者コーパスの中でも学術研究の目的から Web 上で一般公開されている

日本人英語学習者コーパス Corpus of English by Japanese Learners (以下、CEJL) を用いて、日本人英語学習者の誤用例を提示し議論を進める。<sup>1</sup> CEJLの主な中身は名古屋大学の授業で実施された課題の作文コーパスであり、合計15万語と扱いやすいコーパスサイズとなっている。また、コーパス内容は課題(task)と題材(topic)から構成されており、「絵・写真を使って描写する」、「地図を使って指示を行う」、「ストーリーテリング」が前者に分類され、「旅行」が後者に分類されている。そして、「メール・手紙」とこれらのどの分類にも当てはまらない「その他」が、一般的作文・その他に分類されている。

### 3. CEJLに基づく初級英語学習者への局所的文法指導の必要性

#### 3.1. ケース1：前置詞と不定詞の to の混同

日本人英語学習者が最も文法的誤りをおかしやすい文法事項の一つに、表記形 *to* における前置詞用法と不定詞用法の混同使用が挙げられる。その中でも、動詞句表現 *look forward to* の *to* を不定詞句マーカーとして誤用するケースが多い。以下は、学習者コーパスから検出された *look forward to* の一例である。

hey try to fry it and they are looking forward to return to here. But a trouble  
. it is very delicious. so I'm looking forward to back my home in summer vacatio

the driver's licence, so I had looked forward to that travel. I looked through  
veling with my friends. So I'm looking forward to come a vacation. I had ever be  
er vegetables and flowers. I'm looking forward to show them. May be they are ver

江川(1991:360)にも記されるように、*look forward to* の *to* は前置詞であることから *I'm looking forward to see you again.* などは言うまでもなく文法的に不適格で、*to* の直後には(動)名詞(句)が伴うのが通例である。上記の学習者コーパスから検出された *look forward to* の *to* の直後に動詞の原形が頻繁に出現しており、学習者が前置詞の *to* として認識していない事実が見えてくる。

1 [http://www.eng.ritsumei.ac.jp/asao/lcorpus\\_prev/data/index-j.html](http://www.eng.ritsumei.ac.jp/asao/lcorpus_prev/data/index-j.html)

逆に、*to*不定詞であることを認識できずに誤用を招く例も散見される。以下の *traveling* の例を参照されたい。

njoyment. But It cost money. I want to traveling from Hokkaido to Okinawa. When  
ht traveling is enjoyment so I like to traveling. I think Everyone is interested  
an. it is wonderful studying for me to traveling. And It will be nice experience  
ng. And It will be nice experiences to traveling for anyone. I think that we sho  
car, train and motorcycle. If we go to traveling by car. <T Traveling> <S Junio

上記のコンコードンスラインが示すことは、どれも *to*不定詞であるために原形不定詞が生起しなければならない場面で *traveling* が生起しており、日本人学習者が *to*不定詞の文法規則を習得出来ていない、もしくは *traveling* を名詞でなく動詞と誤認している可能性があることを示唆している。

実際、このようなケースは *to* のみに現れる場合が多く、通例、日本人学習者は前置詞の直後には (動) 名詞 (句) が後続するという文法規則は熟知している。以下、*be interested in* を無作為に抽出したコンコードンスラインを参照されたい。

were many animal's children. They were interested in everything. One day they th  
kites came up to their back. They were interested in that, so they tried flying  
an) <G Female> <I 51115> Recently, I'm interested in cooking Japanese food. Beca  
dening must take care every day. I was interested in a gardening when I was ten  
king care of flowers. At any rate, I'm interested in doing it. I only see it <T  
<S Freshman> <G Female> <I 41544> I'm interested in Gardening. But, When I was  
njoy gardening. My grand mother may be interested in it. There is no yard in my  
<S Junior> <G Male> <I 21312> I'm not interested in Gardening. because I'm more  
erested in Gardening. because I'm more interested in watching baseball and playi  
ple, fall into this type, and I am not interested in them very much. The second  
d me to give water. But I was not very interested in it though I felt they are b  
S Junior) <G Female> <I 52525> I'm not interested in Gardening. Because it takes  
<G Male> <I 54425> At first, I am not interested in Gardening very much. The im  
like to traveling. I think Everyone is interested in traveling. <T Traveling> <S  
<S Freshman> <G Female> <I 51515> I'm interested in travering. It can solve a l

〈S Sophomore〉 〈G Male〉 〈I 51512〉 I am interested in travel. I was influenced by  
en I was young. I like India, so I was interested in Targimahar. It is so big an  
he world. To be frank with me, I'm not interested in traveling very much. I pref  
〉 〈S Junior〉 〈G Female〉 〈I 31244〉 I am interested in traveling. Especially I lik

前述の *look forward to* の場合と異なり、動詞句 *be interested in* の使用例では前置詞の文法規則が遵守されている。つまり、日本人英語学習者に必要な文法指導とは、一般的な文法規則の見直しというよりも局所的な文法指導の見直しであろう。特に、本節で見たように前置詞と不定詞マーカー *to* の混同は集中的に取り上げるべき文法事項の一つであると言える。

### 3.2. ケース2：類似した形容詞の混同

日本人英語学習者が誤りやすい例として、次に *be interesting in* のコンコーダンスラインを参照されたい。

Kong? ELC2WABC015: Japanese people are interesting in it. ELC2WABC015: How do yo  
of wild beautiful flower, but I'm not interesting in Gardening. One day our fam  
S Junior〉 〈G Female〉 〈I 32414〉 I'm not interesting in the gardening at all. Thou  
〈S Sophomore〉 〈G Male〉 〈I 42311〉 I am interesting in traveling not so much. Bec

上記の4例から明らかなように、英語学習者が *be interested in* と *be interesting in* を混同して使用していることが分かる。これは *interesting* そのものの誤った使用が引き起こした誤用である。

One day Non-tan and his friends were playing, rising the kites. The kites  
flied up to the sky higher. They were very interesting.[一部修正]

上記は、形容詞 *interesting* の主語に人が出現している誤用例であり、*they* は前文の「ノンタン」と「その友達」を指している。本来なら *It was interesting for/to them.* と訂正すべきところである。仮に *They were very interesting.* とすれば、「その発話

をした発言者（つまり書き手）が彼ら（の行動）を見て面白い」という解釈になってしまい、いわゆる Biber *et al* (1999) の *writer's stance*（書き手のスタンス・立場）や Thompson & Hunston (2000) の *evaluation*（評価）の解釈となってしまう。Wisdom 第2版では、見出し語 *interesting* の「英作文のポイント」において *We were interesting to play cards.* は非文であり *It was interesting to play cards.* と修正すべきであるとし、「おもしろがっている人」が主語にくることはなく *We had fun [a good time] playing cards.* と書き換えるべきであることを記している。CEJL からは他にも *I first time was very interesting.* のような誤用例が検出されたが、この場合も「私のことを他の第3者が面白がっていた」ことを意味することになり、明らかな誤用である。よって、現在分詞形と過去分詞形の使用上の差異を明確に教える必要がある。

### 3.3. ケース3：共起関係

重要語の共起関係を可視化して学習者に提示し、その語の文法規則や共起関係の「気づき学習 (raising awareness)」を促進させることは、学習者が自然な英語表現を習得する上で有効であることが推測される。CEJL から抽出した次の共起関係（下線部）の例を参照されたい。

We travel somewhere and we can meet many people, connect with various language, eat an interesting food and so on. (travel12.txt)

上例は、学習者が *interesting* と *food* を共起させている例である。約1億語のイギリス英語コーパスである British National Corpus (以下、BNC) で検索した結果、*interesting food* の共起例はわずか2例であった (*I'm very dependent on interesting food./ Over 40 wines, ports and sherries, and interesting food all day in the Salad Bar.*)。確かに、「(人目を引くような・好奇心をそそるような) 美味しそうな食べ物[食材]」という意味で使用できなくはないが、かなり稀有な共起例であり、使用することはまずないと考えてよい。下表1は、BNCにおいて形容詞 *interesting* の直後に共起する語をまとめたものである。尚、斉藤他 (2005, p.132) でも説明されているように「広く頻繁に用いられるコロケーション」の判定に t-score が適していることが報告されており、下表1においても t-score 5.0以上の共起語をリスト化した。

表 1. 形容詞 *interesting* の右側第一語に出現した共起語 (Tスコア順)

Order	Collocate	T-score	Order	Collocate	T-score	Order	Collocate	T-score
1	thing	13.30 (191)	8	idea	6.41 (47)	15	contrast	5.46 (31)
2	question	10.29 (113)	9	development	6.18 (45)	16	comparison	5.40 (30)
3	feature	9.98 (102)	10	fact	6.11 (45)	17	article	5.32 (30)
4	point	9.56 (100)	11	story	5.97 (39)	18	finding	5.31 (29)
5	example	9.34 (91)	12	result	5.66 (38)	19	part	5.13 (37)
6	aspect	7.13 (53)	13	case	5.59 (42)	20	place	5.09 (35)
7	reading	6.73 (46)	14	way	5.52 (49)	21	discussion	5.08 (28)

\*T-score 右横の括弧は生頻度を示す。

表 1 から、*interesting* に後続する共起語は「特徴」や「考え」、「比較」など抽象的性質を帯びた現実世界に実体のないものが多いことが分かる。英語学習者の立場にたてば、このような共起情報も意識的に学習させることが重要であろう。

例えば、日本語でも「面白い食べ物」とはあまり言わないことを認識させた後に、英語でどのように表現すべきか考えさせるのも一つの方策である。また、表 1 のようなリストや *interesting* のコンコーダンスラインを学習者に見せどのような共起語が出現しているかその特徴を探らせるのも面白い。このような学習スタイルは Johns (1991a, 1991b) や Nishina (2009) で提案している Data Driven Learning (以下、DDL) の枠組みを踏襲するものである。学習者を英語の研究者とみなすことで発見学習を促進させることこそが DDL の目的であり、DDL における教師の教室内の役割とは、指導者としてではなくあくまで *facilitator* として学習者の能動的学習を促すことにある。言い換えれば、DDL は学習者主導型の英語学習法であると言えよう。実際に、Chujo (2008, 2009) では、2 言語コーパス (パラレルコーパスとも言う) を用いた DDL 指導の効果や、EFL の初級学習者における DDL の有効性を実証している。

また、本節で見た共起関係の誤りが日本人英語学習者に見られる理由の一つには、語法・語用論的な情報を無視した逐語的な 1 対 1 訳読方式の (受験) 学習参考書の存在が挙げられよう (例えば、暗記方式の英単語[熟語]集など)。また、辞書を引くにしても訳語以外の情報をしっかりと読み込まない日本人の英語学習スタイルも起因していると思われる。従って今まで以上に辞書指導の重要性が高まっており、特に Lewis (1993, 1997, 2000) や Nattinger & DeCarrico (1992)、Hunston & Francis (1999) などが提唱するように語が見せる文法やパターン、共起関係などを語用論的な情報や機能も含めて学習者のメンタルレキシコン (門田, 2003) に貯蓄させるような英語教授法が期待される。

## 3.4. ケース4：日本語知識の介入

次は、L1（日本語）の知識の介入による誤用例である。日本人英語学習者の中にはカタカナ語を英語にそのまま転移させて使用するものも多く、以下の *gardening* もそのような誤用例の一つである。

made garden. And then I was belong to gardening culab. I was tought how to be c  
it is the reason that I don't want to gardening. But in my room, there are some  
Gardening. After all, I didn't try to Gardening. So I don't like Gardening. By  
ers and trees. so, I would often go to Gardening with my family. Watching beauti  
<I 52445> When I little girl, I saw to gardening of my grandmother often. I have

名詞 *garden* には動詞用法もあるが、*gardening* は不可算名詞としてのみ使用可能である。上記の5例中、初めの例を除いた4例は to 不定詞の直後に *gardening* が共起している誤用例であり、学習者が *garden* を動詞と認識していれば回避できる誤りである。つまり、日本語の「ガーデニングする」から英語の *gardening* も動詞として使用可能であろうと産出した誤用表現であり、L1の知識がL2ライティングに影響を及ぼしている例といえる。4行目の *gardening* の例においても、*gardening* の意味は「庭いじり」や「庭づくり」であり特定の場所を示すわけではないので意味を成さない。

また、*gardening* を可算名詞として使用している誤用例もしばしば散見される。

care every day. I was interested in a gardening when I was ten years old. But I  
an) <G Male> <I 51424> I don't like a "Gardening", but I look at it and I think  
g, I haven't done Gardening. What is a Gardening? I think it is hobby. I think i  
flower shop. After all, I don't like a Gardening, but I don't dislike a Gardenin  
ike a Gardening, but I don't dislike a Gardening. A joy that making something is

*gardening* は「庭いじり」の行為を示す不可算名詞であるが、可算名詞として誤用する学習者も多い。このような日本人英語学習者におけるカタカナ語の知識の転移は、Groom (2006) や Nishina (2008) における「コンディション」と *condition* の違いなどでも指摘されている。例えば日本語ではサッカー解説者がある選手の様子（パフォーマンス）を見て「あの選手はコンディションが良くないですね」や「芝のコンディションが良くない」と発話したり、学生が「今日はコンディションが良くないので欠席さ



せて下さい」といった表現も日常的に耳にする。以下は Nishina (2009) で添付した NICT JLE コーパスに見られる日本人英語学習者の *condition* のコンコーダンスラインである。

ks. Urr. For my body condition and my health. Uhmm.  
? I usually use my body condition for excuse. I yeah I and yes m  
no so so. So so. Yeah. Er. My condition is mm not good because  
today is mm little cold but mm my condition is not not so bad. Mm Ur  
ke sk spring mm but mm my condition is very bad. Hm. Ahm. I  
uh er ago ah-huh er my condition was too bad err to take  
But uhm rece recently my my condition not bad. But today uhm special on  
will go home at er six o'clock. Because my condition is er bad. No no no.  
in fact uum yester yesterday my condition is not so good. So I I I  
it show it shows my condition .Um. So um I umm  
y garden is no good condition Wow . Uhm  
time erm yeah my condition was very bad .

このコンコーダンスラインから分かるように、日本人英語学習者の *condition* の使用において日本語の「コンディション」の知識が転移していることが指摘できる。実際、英語の *condition* は、深刻な容態を叙述する場合に用いられる傾向が強く、単に「体の調子が悪い」とか「風邪を引いている」程度の状態を指す場合には使用されない。日本語で訳出するならば、「重体」を示す場合が多いのである。以下の用例は、BNC から抽出した *condition* の典型例である。

- Edmunds, aged 19, has undergone emergency surgery for chest injuries at Leicester 's Groby Hospital where his condition was described as serious but stable;
- Pneumonia had followed pneumonia. Despite his crippling disease, he had still managed to practise psychiatry with some success; but finally, the progressive nature of his condition meant that he needed treatment in an intensive care unit with 24-hour-a-day supervision, breathing only with the aid of a respirator.

- Here, the patient, though chronically dependent on the ventilator is a conscious, sentient person. Although his condition is in one sense hopeless, in that he will not recover, it is not hopeless in the sense that he is in imminent danger of dying.

日本語の「コンディションが悪い」を英語で言い換えた場合 *I'm not well* や *I'm sick* になることから、コンディション ≠ *condition* であることを学習者に気づかせる必要がある。このように、L1（母語）と L2（第二言語）において形式上同一であっても語用論的な意味・機能が異なる語に関しては、とりわけ学習者に注意を促す必要がある。Nishina（2009）では、CALL 環境（Moodle）における日本人英語学習者のためのパラレルコーパスを用いた DDL 学習方策を示しているため、そちらも参照されたい。よって、日本語で使用されるカタカナ語とそれに相当する英語の語の意味的な比較を局所的に指導する必要もあろう。

### 3.5. ケース 5 : *because* の使用例

日本人特有の誤用例の一つである *because* の使用にも触れておきたい。小林（2008）は、JEFL と ICLE の両コーパスを用いることで中学生から大学生までの *because* の使用に関して量・質的調査を行い、*because* の特に文頭の過剰使用、並びに主節が欠けた断片文の過剰使用を指摘している。<sup>2</sup> そのような例は、CEJL においても多数検出される。

One day neighborhood were very afraid. Because many Oni, Japanese devils, were a e again. And, Traveling must go alone. Because Travel is found my <T Traveling> d. Especially, I want to go Australia. Because there are many nature in Australi ht. And they try to fly tako far away. Because they want to see tako come back h which flied around the earth and back. Because a line wasn't enough. Then, they u t came back. But it dosen't come back. Because it fall down in doctor's house ro ought that it will come from our back. Because the earth is like ball. "So they gher, we can see the kite in our back. Because the earth is ball, so the kite is

2 石川（2008）は、ICLE\_JP は学習者の中でも英語力の高い英作文が収集されていることから、日本人英語学習者のデータとして使用するには問題があると指摘している。

comes spring, they are very beautiful. Because a lot of flowers begin to saku. M  
nd garden. There are always beautiful. Because my mother always keep on eyes. An  
ooking. My favorite cooking is Chahan. Because it is very easy and short time. <  
so glad, because they had no children. Because the baby was born from the peach,  
that his idea was impossible concept. Because the height of moon is strong wind

森口（2008）は、日本人英語学習者コーパスの一つである Corpus of English Essays Written by Japanese University Students（以下、CEEJUS）を使用し、日本人英語学習者の *because* の使用を分析した。CEEJUS は、中上級の英語力を持つ日本人大学生のエッセイから構築した 190,488 語の学習者コーパスで、学習者のレベルが観察できるように TOEIC のスコアがタグ付けされている。森口（2008）は、この TOEIC スコアの情報を基に習熟度別に学習者のレベルを初級者（Lower）、中級者（Middle）、中上級者（Semi-Upper）、上級者（Upper）の 4 段階に区分して調査している。下表 2 は森口（2008）の表を一部改変したもので、*because* の文頭使用の頻度を習熟度別と英語母語話者間で比較した結果を示す。<sup>3</sup>

表 2. *because* の文頭出現頻度比較

	L	M	U	NS
Total Freq.	18849	88784	13539	342490
文頭の <i>because</i>	33	81	6	49
PMW	1750.8	912.3	443.2	143.1

PMW（100 万語あたりの出現頻度）の比較から、初級学習者から中級、上級、英語母語話者にかけて *because* の文頭使用が減少していることが分かる。特に、初級-中級、そして上級-母語話者間ではカイ二乗検定にて 1% の有意差が見られ、母国語話者と比較して上級学習者においても過剰に *because* を文頭使用していることが分かる。<sup>4</sup> このような *because* の文頭での過剰使用は、日本人学習者のみに見られる傾向ではない。

3 TOEIC 換算で初級学習者は 400-500 点、中級学習者は 500-600 点、上級学習者は 700-点とレベル設定されている。森口（2008）では Semi-Upper レベル（中上級者）も設定しているが本稿では割愛している。

4 PMW の差異を考えると少し驚きだが、中-上級にかけては 5%水準でも有意差が見られなかった。

例えば、Granger & Rayson (1998) は、フランス人英語学習者も従属接続詞の *because* と *if* を過剰使用する傾向にあることを報告している。また、英語非母国語話者が *because* を過剰使用する理由の一つは、三木 (2009) も指摘するように *because* を用いなくても表現できる場面で過敏に *because* を使用していることにあり、適切な接続詞の使い分けを習得する必要がある。<sup>5</sup>

最後に、初級学習者に見られる誤用例の一つである句と節の混同を挙げる。例えば、*because of* は理由・原因を表す句を産出するために使用されるが、初級レベルの日本人英語学習者は *because* と混同し、*because of* に節を後続させる誤用例も散見される。

"NONTAN" is a child of child because of he has many friends and…………..

前置詞の直後には名詞句が後続するといった文法規則に加え、どのような語句が句や節を導くのかという判断を養うための英語学習上の訓練も必要であろう。

#### 4. 教育経験に基づく中・上級英語学習者への局所的文法指導の必要性

##### 4.1. ケース 1: 動詞シノニムのアスペクト問題

日本語他動詞「終わらせる」の英語相当語には *end*、*terminate*、*finish* などがあるが、小西 (1976) が指摘する言語経済の観点を考慮すると、このようなシノニムには何かしら意味上の違いがあり、そのような違いがディスコースにも表在しているはずである。つまり、意味的に同義なシノニムは一つとしてなく、あくまで類似しているにすぎない。

例えば、*end*、*terminate*、*finish* の決定的な違いの一つは、*end* と *terminate* は目的語に *pregnancy* を取れるが (e.g. *end/terminate a pregnancy*)、*finish* は取れない (e.g. \**finish a pregnancy*) 点にあらう。この違いは図 1 に示すように、これらの動詞シノニムが示すアスペクトの違いにあり、*end* と *terminate* は何かを「途中で」終わらせることを描写する場合に用いられ、*finish* はモノの進行が「最終的に」完結する様を示す場合に用いられる。

---

5 三木 (2009) は日本人英語学習者の誤用例と英語母語話者による添削文をパラレルコーパス化し、英語母語話者なら S1 and S2 とすべきところを日本人英語学習者は S2 because S1 のように文を構成する傾向にあることを報告している。

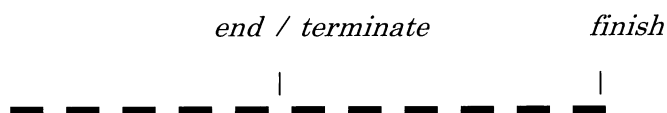


図 1. アスペクトの異なり

妊娠しているという状況は赤ん坊を生むまでの身体的な過程を示していることから、*end*や *terminate*によって中断させることは意味上可能であっても、その過程を最終的に完結させる意味で *finish* (つまり「終わらせる」) を用いることは出来ない。これは、そのような妊娠の過程が完結する時点とは言い換えれば赤ん坊を出産する時点であり、アスペクト上のポイントが動詞句 *bear a child*と重複する結果となる。言語経済の観点から考えると、全く同一の状況を示す言語表現が二つ存在する必要性が無いことから、より自然な *bear*を用いた表現が優先されることになる。

動詞に限らず英語のシノニムは基本的に日本語で同じように訳されることが多く、中・上級レベルの日本人英語学習者にとってもその使い分けには時間を要する。よって、学習者が躓きやすいシノニムの違いを局所的に授業内で指導していく必要がある。

#### 4.2. ケース 2: 名詞-動詞間の単複呼応に関して

中・上級レベルの英語学習者であっても、名詞-動詞間の単・複数形の呼応も習得が難しい項目である。例えば、[冠詞]+(形容詞)+[名詞]+*of*+ [名詞の複数形]のパターンに後置される動詞は、同パターン内 *of*に前置された名詞によって機械的に単・複数が決定されるわけではない。以下、同パターンの3種の例を参照されたい。

- a number of ~s are ... [plural (複数扱い)]
- the (final) set of ~s is... [singular (単数扱い)]
- a (wider) range of ~s is ... [singular (単数扱い)]

*a number of ~s*と呼応した動詞は名詞句を複数扱いしているが、*a (wider) range of ~s*や *the final set of the plots*と呼応した動詞は名詞句を単数として扱う。これらは全て文法上同一パターンであることから、名詞句の統語構造のみでは説明できない。*a number of ~s*は~sが意味的に焦点化され複数扱いとなり、逆に *the (final) set of ~s*

は *the set of* が単数扱いとして焦点化される。また、*a wider range of ~s* の場合は、意味的には *~s* が焦点化されるはずであるが単数扱いとなっている。つまり、英語学習者の負担を軽減するためには形式的側面のみならず意味的側面にも注意を払い、例外規則もまとめて局所的に指導する必要がある。

#### 4.3. ケース 3: *notwithstanding* の用法に見る前置詞の例外規則

前節でも述べたが、文法の例外規則は中・上級レベルの英語学習者においても習得しづらい項目である。そのような他の例として、一部の前置詞にだけ適用される例外規則がある。前置詞はその直後に目的語として名詞（句）が置かれる必要があるが、他の前置詞と異なり *notwithstanding* は元来現在分詞であったことから、例外として前置詞の目的後を「前置」することも可能である（小西・南出、2001）。

S *notwithstanding*, S+V... / S+V, S *notwithstanding*

最近のアメリカ英語を収集したコーパスである *Corpus of Contemporary American English*（以下、COCA）で検索してみると（2010年10月3日検索実施）、*notwithstanding* は合計で 2577 例検出され、その中でコンマの直前に出現した *notwithstanding* が 959 例、ピリオドの直前に出現した例は全部で 266 例検出された。他の例も含めると、前置詞 *notwithstanding* は目的語をむしろ前置する方が数値的にも高くなる傾向にあり、このような新しい視点を授業内や辞書などの教材開発時に取り入れるべきであろう。

#### 4.4. ケース 4: 副詞が見せる語彙パターン

現行の英語教材や英和辞書などは、動詞や名詞に焦点をあてたものが多い。例えば、英和辞典などでは特にこの二つの品詞の文型や共起関係の情報が詳細に記述され、副詞のような他の品詞の情報量は極力抑えられる傾向にある。

しかしながら、数こそ少ないものの最近では英語コーパスに基づき副詞パターンに注目した滝沢（2006）などの研究もある。滝沢（2006）は、BNC の検索結果に基づいた広範囲の副詞の定型表現とその意味・機能を紹介している。取り上げられている副詞は、*freshly*, *hugely*, *popularly*, *heavily*, *increasingly*, *undoubtedly*, *seemingly*, *surprisingly*, *accordingly*, *overwhelmingly*, *exceedingly*, *reportedly*, *repeatedly*, *oddly*, *potentially*, *partly*, *deservedly*, *arguably*, *easily* であり、例えば副詞 *partly*

は *because* と共起し *partly because...* として頻繁に使用され「幾つかある理由のうちの一つは...だ」を簡潔に表現する機能があると指摘している。

The picnic was postponed, partly because it was raining and partly because some of the people were sick. (ピクニックは延期された。一つには雨が降っていたため、もう一つには、病気の人が何人かいたからだ。) (滝沢, 2006, p.81)

無論、*because* の直前には *partly* だけでなく *simply* や *mainly*, *largely* といった他の *-ly* 副詞も頻繁に共起するが、中でも *partly* の共起頻度が最も高いことも指摘している。

大規模英語コーパスを用いることで、実際には未だ解明されていないこのような副詞パターンの言語実態が明らかにされつつある。例えば、BNC において副詞 *suspiciously* は計 347 例検出され、下表 2 はその左側に出現した共起動詞 (be 動詞、do 動詞、have 動詞、一般動詞の現在形、過去形、-ing 形、原形不定詞形、過去分詞形、-s 形の全て) の上位 20 種を示している。

表 2. *suspiciously* の共起動詞の上位 20 種 (L1-L5 は左側 1 語から 5 語を示す)

L1-5	Freq. L5	Freq. L4	Freq. L3	Freq. L2	Freq. L1	Freq.
looked	53 said	4 have	3 looked	26 said	10 acting	25
asked	33 are	1 was	3 asked	4 eyed	8 looked	23
said	27 ask	1 moving	2 see	4 asked	7 asked	22
acting	25 becomes	1 answered	1 seen	4 eyeing	5 said	9
was	15 been	1 are	1 stared	4 was	5 sounds	7
eyed	12 coming	1 began	1 eyed	3 regarded	4 stared	7
stared	11 count	1 eyed	1 eyeing	3 have	3 sounded	6
eyeing	8 demanded	1 failed	1 said	3 looked	3 demanded	5
sounds	8 exposed	1 glittered	1 was	3 are	2 looks	5
regarded	7 get	1 had	1 glared	2 be	2 narrowed	5
been	6 glared	1 mean	1 has	2 been	2 been	3
demanded	6 going	1 missing	1 've	1 had	2 behaving	3
have	6 had	1 noticed	1 avoid	1 is	2 sniffed	3
looks	6 hunched	1 paused	1 begins	1 watched	2 viewed	3
narrowed	6 joined	1 peered	1 being	1 're	1 was	3
seen	6 know	1 referred	1 giving	1 being	1 darting	2
sounded	6 lifted	1 said	1 glanced	1 called	1 gazed	2

L1-5	Freq. L5	Freq. L4	Freq. L3	Freq. L2	Freq. L1	Freq.
are	5 looked	1 see	1 glowered	1 demands	1 look	2
see	5 made	1 seemed	1 hesitated	1 dressed	1 looking	2
had	4 make	1 seen	1 looking	1 forced	1 peering	2

上表 2 から一つの傾向性が読み取れる。それは、実に高い確率で副詞 *suspiciously* が「視覚」動詞と共起するという言語事実である。L1-5 の共起動詞を一瞥するだけで *look* や *eye*, *regard*, *see*, *view*, *watch*, *glance*, *gaze* など視覚が関与した動詞が出現しており、[視覚動詞]+*suspiciously* という独特のパターンを形成する傾向にあることが示唆できる。

このような現在までにあまり注目されていなかった副詞のパターンも、これからの英語教材に積極的に採用することで、特に中・上級レベルの英語学習者が精緻な英語を産出する際の有力な参考資料になることは言うまでもない。

## 5. 結語

本稿では、初めに日本人英語学習者特有の誤用例を紹介し、初級学習者にとってどのような文法事項や語彙知識の指導が必要か提案した。「何が正しくて何が正しくないか」という判断力を養うよりも、「なぜそうなるのか」、「英語らしいとはどういうことなのか」という観点から文法指導を見直すべきであると論者は考え、そういった意味でも DDL などを活用して学習者に生の英語に触れさせることは有効であると考えている。また、本稿の後半では、論者自らの英語教育経験から特に指導が複雑であると感じた中・上級レベルの日本人英語学習者向けの局所的な英文法事項を紹介した。中でも、副詞が見せる意味的パターンなどは非母国語話者にとって新しい文法事項ではあるが、このような項目をマスターすることでより一層精緻な英文を産出することが可能になるものと思われる。コーパスから獲得した客観的な知見と教育経験から獲得した主観的な知見をバランスよく混在させることで、効果的且つ効率的な英語教育を学習者に提供することが可能になると論者は信じている。

## 参考文献

- Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad., & E. Finegan. (1999). *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson Education.
- Chujo, K., & Oghigian, K. (2008). A DDL Approach to Learning Noun and Verb



- Phrases in the Beginner Level EFL Classroom. Proceedings of the 8th Teaching and Language Corpora Conference (TaLC), Lisbon, Portugal (p. 1-18).
- Chujo, K., Anthony, L., & Oghigian, K. (2009). DDL for the EFL Classroom: Effective Uses of a Japanese-English Parallel Corpus and the Development of a Learner-Friendly, Online Parallel Concordancer. Proceedings of the Corpus Linguistics Conference 2009.
- 江川泰一郎. (1991). 『英文法解説 改訂三版』. 東京: 金子書房.
- Granger, S., & Ravson, P. (1998). Automatic profiling of learner texts, In S. Granger. (Ed.), *Learner English on Computer* (pp.119-131). London/New York: Longman.
- Groom, N. (2006). Phraseology, identity, community, motivation. *The Language Teacher*, 30(7), 25-27.
- Hunston, S., & Francis, G. (1999). *Pattern Grammar: A Corpus-Driven Approach to the Lexical Grammar of English*. Amsterdam: John Benjamins.
- Hunston, S., & Thompson, G. (2000). *Evaluation in Text Authorial Stance and the Construction of Discourse*. Oxford: Oxford University Press.
- 井上永幸・赤野一郎. (2006). 『ウィズダム英和辞典 (第二版)』. 東京: 三省堂.
- Johns, T.F. (1991a). Should you be persuaded: Two examples of data-driven learning. *English Language Research Journal*, 4, 1-13.
- Johns, T.F. (1991b). From printout to handout: Grammar and vocabulary teaching in the context of data-driven learning. *English Language Research Journal*, 4, 27-45.
- 小林雄一郎 (2008). 「Because の断片文に関する量的分析と質的分析」『第34回全国英語教育学会東京研究大会発表予稿集』, 382-383.
- 小西友七・南出康世. (2001). 『ジーニアス英和大辞典』. 東京: 大修館書店.
- Lewis, M. (1993). *The Lexical Approach*. Hove: Language Teaching Publications.
- Lewis, M. (1997). *Implementing The Lexical Approach*. Hove: Language Teaching Publications.
- Lewis, M. (2000). *Teaching collocation: Further developments in the lexical approach*. Hove: Language Teaching Publication.
- 三木望. (2009). 「日本人英語学習者の causality の習熟度: パラレルコーパスの分析を通して」英語コーパス学会発表用ハンドアウト (於 青山学院大学).

- 森口寛子. (2008). 「日本人英語学習者の理由表現の使用 BECAUSE を中心に」 大学英語教育学会 第84回東アジア英語教育研究会発表用ハンドアウト (於 西南学院大学).
- Nattinger, J.R., & DeCarrico, J.S. (1992). *Lexical Phrases and Language Teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Nishina, Y. (2009). A Lexical Study Based on Parallel Corpora, DDL, and Moodle. (eds.) Rita de Cássia Veiga Marriott and Patricia Lupion Torres. *E-Learning Methodologies for Language Acquisition*.
- 斉藤俊雄・中村純作・赤野一郎. (2005). 『英語コーパス言語学－基礎と実践－改訂新版』 東京：研究社.